二度と巡り会うことのできない本

酪農学園大学教授
尾野 麻紀子（英米文学）

誰しもが自分の歩んできた道を振り返ると、自分の人生に少なからず影響を与えた、偶然とも必然とも言い難い出会いがあると思う。私にとって『神谷美恵子著作集』は、そのような本である。

『神谷美恵子著作集』（全10巻、別巻1、補巻2、みすず書房、1980～1985）が刊行されてから20年以上たつが、2005年新たに『神谷美恵子コレクション』（全5巻、みすず書房、2004～2005）が刊行された（もちろん、今回の『コレクション』にも彼女の代表作ともいうべき『生きがいについて』『こころの旅』『人間を見つめて』は収録されている）。これは、「刊行の言葉」にあるように主要な著作を新たに編集し、各巻末に、著者の未公開の文章と解説が加えられたものである。今回の『コレクション』の出版は、神谷美恵子の新たなる再評価であり、彼女の思想の普遍性を示すものと言えるであろう。彼女の愛読者としては願ってもないことであった。

たまたま、2005年の『英語教育』5月号で、『こんな時代と向き合うために―学び続ける教師』のためのブックガイド』に、なんと神谷美恵子『こころの旅』が挙げられていたが、これは正直なところ、嬉しい驚きであった。この書を取り上げた著者は『こころの旅』の「人の生にこんなにも重味が感ぜられるのはその生命にこころなるものがあまりにも発達してそなわってしまったからなのであろう。人生とは生きる本人にとって何よりもまずこころの旅なのである」の一節を引用し、「著者（神谷美恵子）の静かな言葉は、迷う教師には何よりのいやしとなる」と述べている。神谷美恵子が英語教育との関連でとりあげられたのは、筆者の知る限り、これがはじめてであると思われるが、「英語教師」という職業をこころの旅と関連づけ、あえて、英語教師の読むべき本の中に、この書をとりあげた執筆者には大いなる敬意を表したい。

もちろん、『神谷美恵子』が、教師のために書かれた「教育学」だけのジャンルに収まるものではないことは、著者ゆかりの人びとへのインタビューやエッセイにも述べられているが、筆者にその感を強めさせたのは、鶴見俊介の「神谷美恵子は聖者である。……日本の哲学史が神谷美恵子の項目を欠くことに、私は、哲学観の片寄りを感じる」とのひと言である。どの巻、どのページを読んでも、神谷美恵子の視野の広い、豊かな世界に引き込まれていく。

神谷美恵子が家庭人になった頃とは比較にならないほど、現在は家事が軽減され便利になったとはいえ、今なお多くの女性が、仕事と家庭の両立の難しさを感じているのは言うまでもない。その困難さの中で、自ら「デーモン」と呼んだ、多くの才能をもつが故に、分裂しそうな自己を抑え、家庭人となり、ふたりの子どもを育てあげ、これほどの仕事を成し遂げた神谷美恵子のような人は、もう二度と現れないのではないかと思う。彼女のような人が、実際この世に存在したこと自体、奇跡なのであるとすらいえよう。

『神谷美恵子コレクション』の刊行を機に、神谷美恵子の訳した、マルクス・アウレーリウス『自省録』を読み返してみた。神谷美恵子は、彼女の日々の生き方の哲学の根底にマルクス・アウレーリウスを据えているが、彼女の行為は、優にマルクス・アウレーリウスを越えてしまったと痛感せざるを得ない。